

---



---

## 研究報告

---



---

順天堂大学医療看護学部 医療看護研究17  
P.18-26(2016)

# 道徳性発達査定の問題紙（DIT）の問題項目再考及び 学部による回答傾向の違い

## Reconsidering of Items of Defining Issues Test (DIT), a Questionnaire for Moral Development and Difference between Nursing Students and Students of other Faculties

山 岸 明 子\*  
YAMAGISHI Akiko

### 要 旨

Kohlbergの道徳性発達段階を査定する問題紙として広く使われているDIT: Defining Issues Testの中のHeinzの例話に関して、今まで取り上げられてこなかった新たな考え方を質問項目としてつけ加え、合わせて学部間の違いについても検討を行った。新たな考え方は「他の方法の考慮」と「余生の考慮」で、被調査者は看護学・医学・スポーツ健康科学を専攻する大学1年生239名である。各ステージの考え方を表すDITの11項目と新たな2項目の重要度と、1番重要から3番目に重要までの項目を選んでもらった。

その結果1) 因子分析の結果2項目は他項目とまとまることはなかった。2) 2項目とも学生から重要ととらえられていた（特に「他の方法の考慮」）。3) 学部により重要ととらえる考え方に違いが見られた。4) 「余生の考慮」は看護学専攻で重要度が高く、医学専攻生では低かった。「余生の考慮」の考え方が日本の文化に由来する考え方なのか、看護学専攻が関与しているのかの検討、及びその考え方が道徳性の発達の観点からみてどう位置づけられるのかを検討することの必要性が示された。

キーワード：道徳性発達、DIT、コールバーグ、ケア、看護学生

Key words: moral development, DIT, Kohlberg, care, nursing students

### I. 緒言

Kohlbergは道徳性の発達を「正しさをどうとらえるか」という認知的な問題としてとらえることを提唱し、6発達段階説を唱えた<sup>1) 2)</sup>。その理論、方法を使って多くの研究がなされ、Kohlberg理論は発達心理学や道徳教育に大きな影響を与えてきた。6つの発達段階の概要は資料1の通りである。6つの発達段階への査定は、道徳的価値が葛藤する例話を提示し、主人公はどうすべきかを面接法で詳細に問うという方法でなさ

れる。そしてそのプロトコルは理論に基づく詳細なマニュアル<sup>3)</sup>に従って評定される。Rest他(1974)<sup>4)</sup>はその複雑な方法を質問紙法で行い、簡単に発達段階を査定する方法を考案した。それは、Kohlbergの面接法で使われる例話や同様な道徳的葛藤場面を用い、あらかじめ各発達段階に基づく考え方を選択項目としてあげて、どのようなことを考えて判断するか、それらの項目の重要度を聞いた上で重要なものを選択させるもので、DIT (Defining Issues Test) と命名された。妥当性ももち且つ簡便な方法として広く使われており、Rest他(1999)<sup>5)</sup>では、DITを用いた研究として400以上の研究のレビューがなされている。

---

\* (元)順天堂大学

(before) Juntendo University

(May. 8, 2015 原稿受付) (Jan. 22, 2016 原稿受領)

日本でも1980年に日本版が作成されている(山岸, 1980)<sup>6)</sup>。櫻井(2011)<sup>7)</sup>は、日本版DITを1984年から2008年まで、25年間という長期にわたって中学生に実施してデータの分析を行っているが、時期による差はないことが報告されている。但し例話の内容は、自衛官の大学院入学、教授会による学部自治の問題等、現在の日本には合わないものもあり、それらの例話は使われなくなっている。Restらも、時代と共に発達の査定に役立つ道徳的葛藤場面も変化すると考え、1990年代後半には新しい版であるDIT2を作成している(Rest et al., 1999)<sup>8)</sup>。日本では新版のDITはまだ作成されていないが、DITを用いた研究として心理学領域以外に、医学領域(赤林他, 2004<sup>9)</sup>等)、看護領域(堀口他, 2004<sup>10)</sup> 土井他, 2012<sup>11)</sup> 米澤他, 2013<sup>12)</sup>等)、会計学領域(原田, 2011<sup>13)</sup>等)でも行われている。

筆者は、40年前に小・中・高校生や大学生・大学院生に面接調査を行い、彼らの考えをKohlbergの方法に基づいて尋ねて、スコアリング・マニュアルによって発達段階を査定した(山岸, 1976)<sup>14)</sup>。その結果日本でもKohlbergの発達段階の考え方が見られるが、日本では早期からステージ3の者がみられること、全体的に他者の気持ちを考えて判断する者が多く、Gilliganの「配慮の道徳性」<sup>15)</sup>との関連が示唆された。その後、時に大学での講義でKohlberg理論について触れ、Heinzの例話<sup>1) 2)</sup>についてどう思うか書いてもらってきた。Heinzの例話では、Kohlbergの例話の中で最も有名な「がんに冒された妻の生命を助けるために薬屋から薬を盗むか」が問われ(cf.資料2)、「法律」と「生命」の価値が対立する状況での判断が求められる。大学生は判断の理由としてステージ2、3、4、原則的水準に該当する理由をあげたが、特にステージ3に該当すると思われる他者の気持ちへの配慮が頻繁にみられた。その他に「善悪の問題というより、現実的な問題として、色々な方略を考える」者も見られたが、最近はその傾向が強まり、盗む以外の色々な方略を提案する者が増えてきた。更に近年、以前の面接では全く見られなかった反応-「妻のQOLを上げ静かに大切に過ごす」「盗んだりせず幸せに死なせたい」「運命だから諦める」「余生を充実させる」等、現状に立ち向かうことなくそのまま受容する意見が見られるようになってきている。

その様に以前の面接では全く見られなかった反応やあまり目立たなかった反応が見られることについて、40年前と時代状況が異なることが関与している可能

性が考えられる。

Kohlberg理論とは異なった考え方があるのではないかという批判は、理論提唱時から数多くなされてきたが(Gilligan, 1982<sup>15)</sup>, Kohlberg, Levine, & Hwer, 1983<sup>16)</sup>等)、Kohlbergの発達段階とは異なった考え方をDITの質問項目に加える試みはまだなされていない。本研究では日本の大学生に見られる考え方をDITの項目に新たにつけ加えて、Kohlbergの発達段階に基づくDITの項目との関連を見ると共に、その考え方が現代日本の大学生にどの程度見られるのかを検討する。

また道徳性の発達とは他者との関係の持ち方や社会・集団所属のあり方、規範の示され方等様々の要因が関与することが指摘されているが<sup>1) 2)</sup>、そのような経験と学問志向や職業志向が関連することが考えられる。Rest & Narvaez<sup>16)</sup>は、医学生と法学生は一般的な大学生よりも得点が高いという学部差を報告しているが、筆者も異なった3学部-スポーツ健康科学系(以後スポーツ系と略記)・医学系・看護系-の学生に講義をする中で、道徳判断が異なる印象をもっている。本研究では、スポーツ系・医学系・看護系を専攻しようとするものと「道徳」のとらえ方に関連があるのかについての実証的検討も行う。

## II. 目的

本研究の目的は、1) Kohlberg理論にはないが、最近の日本の大学生に見られる考え方をDITの項目に新たにつけ加えて、Kohlbergの発達段階に基づくDITの項目との関連を見る、2) その考え方が現代日本の大学生にどの程度見られるのかを検討する、3) DITへの回答傾向が学問志向や職業志向が異なる3学部-スポーツ系・医学系・看護系で異なるかを検討する。以上である。

## III. 方法

### 1. 被調査者

同時開講の2つの講義を受講している大学1年生239名(男子108名 女子125名 不明6名)である。学部の内訳はスポーツ系67名、医学系65名、看護系107名である。(なお2つの講義は一般教育の選択科目の「共通講座:新しい世界を拓いた人々」及び「人間の生き方」で、3学部の学生が受講していること、本研究の課題に興味をもつ者が多いと予想されることから、調査の対象とした。)

## 2. 調査期間

2013年7月

## 3. 質問項目

DITの質問項目は各発達段階の考え方を反映するように作成されており、自分が判断する時にその観点をどの程度重要と考えるかが問われ、更に特に重要な考え方はどれかに回答することが求められる。Heinzの例話の質問項目は11項目であり、高校生以上を対象とするため、ステージ3、4、5の考え方（DITではステージ5と6は原則的水準（P）として一括して扱われているため、本研究では一括して「5」と表記する）の項目が多くて各3項目、ステージ2と4½が1項目ずつである。なおステージ4½は4から5への移行期で、内容的にはステージ2と似ているが慣習的道徳性を問い返す視点をもつ倫理的相対主義の考え方である。その11項目に、新たに「問題と目的」で述べた「盗み以外の現実的な方略を考えようとする」考え方と、「現状に立ち向かうことなくそのまま受容する」考え方をつけ加えることとし、「盗み以外にAさんにできることはないだろうか」「盗みなどせずに、静かに余生を過ごす方が2人にとって幸せなのかどうか」という2項目をつけ加えた13項目を用いた。

## 4. 手続き

同時に開講されている2つの選択科目の受講生に対して、その時間の担当教員により実施された。講義終了後、研究責任者名と研究の意図を記載した質問紙を配布して、協力は自由意思であり、匿名での回答であることを口頭で説明し、協力を依頼した。まず「盗んだ方がいい」「盗みではいけない」「どちらともいえない」のどれかを選んでから、13項目それぞれの重要度を「非常に重要」5から「全く重要ではない」1までの5件法で回答し、その後13項目の中で「1番重要」「2番目に重要」「3番目に重要」の項目を選択させた。回収は、回収箱に入れてもらった。

## 5. 分析方法

データは数値化して統計ソフトに入力した。新たに作成された2項目と他の11項目との関係を全体のおおよその構造からみるために、13項目の因子分析を行った。更に13項目の重要度及び重要として選ばれた得点について、学部別の平均得点を算出し、学部間の差を検討するために一元配置の分散分析を行い、事後の検

定としてBonferroni法による多重比較を行った。分析にはIBM SPSS Statistics ver.21を使用した。

## 6. 倫理的配慮

実施に際して、協力は自由意思によること、成績評価とは無関係であり、不提出によって不利益が生じることはないことを説明して、強制的なものではないことを伝えた。また結果は統計的処理をした上で研究誌に公表することがあること、提出をもって同意とみなすことを伝えた。回答は匿名で行い、回収は回収箱を使用した（なお両講義の受講者（単位取得者）は計461名であったが、回答者は239名あり、協力は自由意思であったと考えられる。）

## IV. 結果

### 1. 質問項目の因子分析

DITはKohlbergの非常に複雑なステージを簡単な質問項目で表わそうとするもので、そもそも因子分析においてステージごとに明確にまとまることは想定されておらず、Restも妥当性の検討は併存的妥当性や予測的妥当性によっており、因子的妥当性は検討していない<sup>5)</sup>。しかし本研究は新たな考え方のとらえ方を見るのが中心であるため、全体のおおよその構造をみる方法として因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った（cf.表1）。その結果、第1因子はステージ4と5、第2因子はステージ2と3及び4½、第3因子は「薬屋非難」（ステージ3）、第4因子は「余生の充実」の項目に高い負荷が見られた（4因子の累積寄与率は52.26%）。新しくつけ加えた項目6「盗み以外の方法」と項目11「余生の充実」に関しては、後者はコールバーグのステージとは別に第4因子で高い因子負荷を示し、前者は4因子解に入らなかった。

### 2. 判断に際して各項目が重要とされた程度

学部別の13項目及び因子分析の第1・第2因子に属す項目が重要とされた得点の平均値（標準偏差）（得点のレンジは1～5である）は表2の通りである。新しくつけ加えた項目6「盗み以外の方法」と項目11「余生の充実」の重要度は「盗み以外の方法」は医学系・看護系は最高得点、スポーツ系は2番目に高得点で、「余生の充実」も学部によって異なるが、スポーツ系は全体の平均程度、看護系は3番目に高い得点であった（医学系は低得点）。

3学部を独立変数、13項目及び2つの合成変量を従

表1 質問項目の因子分析(主因子法 バリマックス回転)の結果

| 質問項目                          | ステージ | I     | II    | III   | IV    |
|-------------------------------|------|-------|-------|-------|-------|
| 13. 盗むことが他の人の権利侵害にならないかどうか    | 5    | .566  | .103  | .118  | .043  |
| 5. 薬を発見した薬屋の権利は尊重されているかどうか    | 4    | .521  | -.033 | -.091 | .143  |
| 10. 法律が構成員の基本的欲求実現を阻んでいないかどうか | 5    | .485  | .144  | .099  | -.219 |
| 1. 社会の法律がそのことを是認するかどうか        | 4    | .433  | -.360 | .059  | .100  |
| 8. 他の人にどう振る舞うかを定める根本の価値は何か    | 5    | .431  | -.027 | .158  | .011  |
| 2. 愛する妻のことを思ったら盗むのが自然かどうか     | 3    | -.186 | .521  | .234  | .071  |
| 4. 盗むのは奥さんのためなのか、自分のためなのか     | 3    | .064  | .500  | -.047 | .025  |
| 3. 危険を冒してまで奥さんを助ける必要があるかどうか   | 2    | .094  | .484  | .093  | .279  |
| 9. 無意味な法の庇護により薬屋は許されているのか     | 4½   | .336  | .425  | .356  | -.344 |
| 12. このような薬屋は盗まれても当然かどうか       | 3    | .118  | .101  | .855  | .060  |
| 11. 盗みなどせず余生を充実させる方が幸せなのかどうか  |      | .051  | .139  | .089  | .481  |
| 6. 盗む以外にAさんにできることはないだろうか      |      | .288  | .078  | -.063 | .237  |
| 7. 夫として奥さんの命を救う義務があるかどうか      | 4    | .117  | .319  | .263  | .135  |
| 回転後の因子負荷量の平方和                 |      | 1.47  | 1.24  | 1.12  | 0.59  |

太字：.4以上

表2 3学部別の質問項目の重要度の平均値と差の検定結果

| 質問項目                | ステージ | 平均値(標準偏差)   |              |             | 分散分析     |                  |
|---------------------|------|-------------|--------------|-------------|----------|------------------|
|                     |      | スポーツ系 S     | 医学系 M        | 看護系 N       | F値       | 多重比較(注)          |
| 1. 法律が是認するか         | 4    | 3.21 (1.31) | 3.62 (1.10)  | 3.61 (0.98) | 3.14*    | S < N+           |
| 2. 愛する妻を思ったら自然か     | 3    | 4.19 (1.08) | 3.38 (1.22)  | 3.51 (1.00) | 11.14*** | S > M, N***      |
| 3. 危険を冒してまで盗むか      | 2    | 3.69 (1.33) | 3.09 (1.38)  | 3.02 (1.30) | 5.67**   | S > M + S > N*** |
| 4. 奥さんのためなのか        | 3    | 3.79 (1.08) | 2.78 (1.24)  | 2.92 (1.32) | 13.73*** | S > M, N***      |
| 5. 薬屋の権利の尊重         | 4    | 2.93 (1.09) | 3.03 (1.012) | 2.98 (1.17) |          |                  |
| 6. 盗み以外の方法          |      | 4.10 (1.23) | 3.98 (1.19)  | 4.24 (0.95) |          |                  |
| 7. 夫としての義務          | 4    | 3.54 (1.40) | 3.05 (1.19)  | 2.84 (1.13) | 6.72***  | S > M + S > N*** |
| 8. 根本の価値は何か         | 5    | 3.20 (1.22) | 3.80 (1.30)  | 3.43 (1.18) | 4.05*    | S < M*           |
| 9. 無意味な法の庇護         | 4½   | 3.57 (1.20) | 2.97 (1.22)  | 2.95 (1.21) | 6.09**   | S < M N***       |
| 10. 構成員の基本的欲求実現の阻害  | 5    | 3.27 (1.20) | 3.40 (1.30)  | 3.10 (1.15) |          |                  |
| 11. 余生の充実           |      | 3.46 (1.21) | 3.06 (1.27)  | 3.59 (1.15) | 3.99*    | M < N*           |
| 12. 薬屋への非難          | 3    | 2.64 (1.33) | 2.86 (1.29)  | 2.45 (1.03) | 2.45+    | M > N+           |
| 13. 他の人の権利侵害        | 5    | 3.06 (1.25) | 3.33 (1.26)  | 3.32 (1.10) |          |                  |
| 項目全体の平均値            |      | 3.43 (0.54) | 3.25 (0.55)  | 3.23 (0.47) | 3.49*    | S > N*           |
| 因子分析I群(ステージ4、5)     |      | 3.13 (0.80) | 3.44 (0.70)  | 3.29 (0.68) | 3.00+    | S < M*           |
| 因子分析II群(ステージ2、3、4½) |      | 3.81 (0.73) | 3.06 (0.78)  | 3.10 (0.74) | 22.60*** | S > M, N***      |

\*P<.05, \*\*P<.01, \*\*\*P<.001, +P<.10

(注) S>M, N\*\*\* スポーツ系が医学系及び看護系よりも0.1%水準で高得点の意

属変数とした一元配置の分散分析を行い、事後の検定としてBonferroni法による多重比較を行った。その結果を表の右側に示した。

スポーツ系の学生は他の2学部よりもステージ2や3の得点(項目2、3、4)及び因子分析でそれらと同一の因子に位置づけられたステージ4½(項目9)、そしてそれらの合計であるII群で他の学部よりも得点が高い。スポーツ系の学生が重要としたものは、3学部とも高い「盗み以外の方法」を除くと、「愛する妻のため」が突出しており、それに続くもの

もステージ3と2であり、ステージ5は3項目とも期待値(46.2)の1/2に達していない。

医学系はスポーツ系の学生が高かった得点が低く、またステージ5の項目が高く、項目8「根本の価値」とステージ4と5からなるI群ではスポーツ系よりも有意に高かった。

看護系は医学系と傾向が似ている場合と、医学系とスポーツ系の中間の場合が多かった。項目11「余生の充実」は医学系よりも得点が高い、項目12「薬屋への非難」は低い傾向がみられ、またスポーツ系と

比べて項目7「夫としての義務」が有意に低くなっている。

### 3. 各項目が重要な考え方として選択された頻度

表3は13項目の中から1番、2番、3番目に重要としてどの位選ばれたかの得点-1番重要と選択された場合に3点、2番目は2点、3番目は1点、選択されない場合は0点とした得点の平均値に10を掛けた値 (rangeは0~30、期待値は $(3+2+1)/13=4.62$ ) を3学部で比較したものである。新しくつけ加えた項目6「盗み以外の方法」の得点が非常に高くなっており、医学系と看護系では1番、スポーツ系でも2番目に選ばれている。表2と同様スポーツ系の学生はステージ3の得点が高く、4や5は低い傾向が見られ、項目2と4(共にステージ3)、項目8と10(共にステージ5)では他学部と有意差が見られている。医学系はステージ5の項目の得点が他の2学部よりも高く、スポーツ系との差は有意である。看護系はステージ5の項目に関してはスポーツ系と医学系の間の中点である。そして項目11「余生の充実」が3番目に高く、医学系との差は有意である(医学系は2点台の低得点グループである)。

## V. 考察

### 1. DITの項目と新たにつけ加えた2項目との関連

新たにつけ加えた項目「盗み以外の方法」と「余生の充実」を加えた13項目で因子分析を行った結果、第

1因子はステージ4と5という道徳を社会的・原則的にとらえる高レベルの項目、第2因子と第3因子はステージ2と3及び4 $\frac{1}{2}$ という道具的あるいは対人的にとらえる項目で因子負荷が高い一方、新しくつけ加えた項目「盗み以外の方法」と「余生の充実」に関してはどちらも因子分析で他の項目とまとまることはなかった。

DITは一般的な質問紙とは異なり、非常に複雑な手続きによって査定されるステージを質問紙で簡易的にとらえようとするものであり、またKohlberg理論におけるステージも、1人の人がある一つの考え方だけをもつというわけではなく、複数のステージが混在していることもあると考えられている。従って因子がステージ毎にきれいにまとまるというものではないが、本研究では第1から第3に関しては、意味をもつようなまとまりを示している。そして新しくつけ加えた項目はそれらの因子の中にまとまることはなく、Kohlbergの発達段階とは異質な観点であることが示されたといえる。

### 2. 新たにつけ加えた2項目の考え方が重要とされる程度

新たにつけ加えた2項目はKohlberg理論にはない観点であり、本研究で独自に作成されたものであるが、「盗み以外の方法」の重要性は医学系・看護系では最高得点、スポーツ系では2番目に高得点であった。そのような回答は1976年の論文の面接時にも見られた

表3 3学部別の質問項目の被選択得点の平均値と差の検定結果

| 質問項目               | ステージ            | 平均値 (標準偏差)   |              |              | 分散分析  |               |
|--------------------|-----------------|--------------|--------------|--------------|-------|---------------|
|                    |                 | スポーツ系 S      | 医学系 M        | 看護系 N        | F値    | 多重比較 (注)      |
| 1. 法律が是認するか        | 4               | 5.15(10.29)  | 7.69(11.83)  | 7.10(10.99)  |       |               |
| 2. 愛する妻を思ったら自然か    | 3               | 12.50(13.42) | 6.46(10.67)  | 5.79(10.73)  | 7.66  | S>M**, S>N*** |
| 3. 危険を冒してまで盗むか     | 2               | 2.35( 6.72)  | 3.08( 8.83)  | 1.96( 6.65)  |       |               |
| 4. 奥さんのためなのか       | 3               | 5.74( 9.97)  | 2.15( 6.73)  | 4.39( 8.81)  | 3.00+ | S>M*          |
| 5. 薬屋の権利の尊重        | 4               | 1.32( 5.16)  | 2.61( 6.68)  | 1.68( 5.58)  |       |               |
| 6. 盗み以外の方法         |                 | 11.18(11.18) | 10.31(12.74) | 12.71(12.63) |       |               |
| 7. 夫としての義務         | 4               | 3.09( 7.38)  | 2.00( 6.66)  | 1.87( 6.16)  |       |               |
| 8. 根本の価値は何か        | 5               | 2.21( 6.35)  | 8.62(10.88)  | 5.61( 9.73)  | 9.14  | S<M***S<N*    |
| 9. 無意味な法の庇護        | 4 $\frac{1}{2}$ | 3.09( 7.97)  | 1.54( 5.07)  | 3.55( 8.16)  |       |               |
| 10. 構成員の基本的欲求実現の阻害 | 5               | 1.91( 6.29)  | 5.39( 9.53)  | 2.99( 7.67)  | 3.34* | S<M*          |
| 11. 余生の充実          |                 | 5.00( 9.38)  | 2.46( 7.30)  | 6.26(10.33)  | 3.36* | M<N*          |
| 12. 薬屋への非難         | 3               | 1.03( 4.28)  | 1.08( 4.00)  | 1.12( 5.02)  |       |               |
| 13. 他の人の権利侵害       | 5               | 2.09( 6.64)  | 4.77( 9.03)  | 3.46( 7.93)  |       |               |

期待値 =  $(3+2+1)/13=4.62$

\*P<.05, \*\*P<.01, \*\*\*P<.001, +P<.10

し、GilliganもKohlberg批判として女性はKohlberg流の判断をせず話し合いを続けると答える者が多いとした(Gilligan, 1982)<sup>15)</sup>。Heinzの例話に対して「盗むか否か」ではなく他の方法を考える者がいるとする報告は多いが<sup>15) 16)</sup>、今回のデータではその観点の重要度が最も高く、自主的な回答でも「話し合い」に限らず様々な方略があげられていた。

「余生の充実」は日本の以前の調査では全く見られなかった観点だったが、医学系では低得点だった一方、スポーツ系では全体の平均程度の得点、看護系では3番目に高い得点であった。「生命を救うために法を犯すことは正しいか」という道徳判断を求められた時に、人間の権利や生命の価値を考え「正しいことは何か」を考えるのではなく、現状を受け入れた上で妻の余生をどうするかを考える者が看護系ではかなりおり、スポーツ系でも他項目と同程度の重要性をもっていた。他者の権利のために困難と戦って勝ち取るという志向ではなく、現状を受け入れ状況に合わせて穏やかに生きるという生き方は、「西欧」対「日本」の自己のあり方(Markus & Kitayamaの「相互独立的自己観」対「相互協調的自己観」)<sup>17)</sup>とも関連している可能性が考えられる。

### 3. DITへの回答傾向の学部による違い

道徳性の発達や道徳的な問題への対し方と学問志向や職業志向が関連することが考えられるため、3学部での違いを検討した。

スポーツ系の学生は他の2学部よりもステージ2や3の考え方を重要と考え、ステージ5を重要と考える傾向が低いことが示された。大学でスポーツ系の学部に所属している学生は、成長過程でスポーツ活動に励んだ者が多く、決められたルールに従ってプレイすることを求められてきていると思われるが、そのことが「ルール」一般のとらえ方にも影響して、道徳的・法的ルールに関しても社会的・原則的にとらえることが少なく、他の2学部よりも個人的な視点からとらえる者が多いと考えられる。

医学系はスポーツ系と反対の傾向を示し、ステージ2や3は重要と考えず、ステージ5を重要と考える者が多かった。道徳的・法的ルールを社会的・原則的にとらえる傾向が医学系で一番高いのは、医学が人間の生命を扱い、大きな社会的役割をもつことと関係していると考えられる。Rest & Narvaez<sup>16)</sup>の「医学生は法学生と共に、一般的な大学生よりも得点が高い」と

いう結果と同様な結果であった。

看護系は医学系と傾向が似ている場合が多かった。但し看護系の学生が「生命を助けるために盗むか」の問いに対してKohlbergのステージにはない「余生の充実」を考える志向を見せたのに対し、病気を治療する医学を学ぼうとする学生はその得点が低く、死を受け入れるというあり方を選ぶ者は有意に少ないという結果であった。病気を担った患者のケアについて学ぼうとする学生は、まだ看護学を学びだしたばかりだが、生命を救うということそのものではなく、死に直面している他者にとって何が一番望ましいかを考え、その一つとして病気の治療ではなく余生をよいものにするというあり方を選んだと考えられる。

本研究の被調査者は入学して2ヶ月の1年生で、それぞれの学問に触れることはまだ少ないにもかかわらず、学問・職業志向と道徳性の関連が示唆されたが、「共通講座」は3学部で討論するという授業であったことが自分の専攻を意識させて、学部間の差につながったとも思われる。今後より学年が進んだ者で検討することが望まれる。

### 4. 道徳性研究における本研究がもつ意義と今後の課題

本研究ではKohlbergの発達段階とは異なった考え方をDITの質問項目に加えて、その考え方が現代日本の大学生にどの程度見られるのかの検討を行った。そのような研究は今までされてこなかったことであり、特に「余生の充実」という観点は従来の道徳性の理論-Kohlberg理論<sup>1) 2)</sup>は勿論、Gilliganのケアの倫理<sup>15)</sup>やKohlberg批判の研究<sup>16)</sup>でもみられない観点である。その考え方を質問項目に加えて、他の観点と比べて重要とされるかを検討したことは本研究の大きな意義と考えられる。

何が正しいことなのかを考えて現状をよくするために行動するのではなく、現状を受け入れた上で現実的に最善の生き方を考えようとするあり方は、看護系の学生において重要とされる傾向が見られたが、看護学でケアを学ぶことと特に関連しているのか、それともより一般的な志向性なのか検討することが必要である。最近の若者は「さとり世代」と呼ばれ、無駄な努力や衝突は避け、大きな夢や高望みもなく、合理的な行動を心がけられるとされているが、それとの関連も考えられる。3学部以外の他の学部の学生ではどうかを検討することが望まれる。

「余生の充実」は「他の方法の考慮」と同様、対立を避け現状のままで何とか現実的に対処する志向であるが、2.でも述べたように「西欧」対「日本」の自己のあり方－「相互独立的自己観」対「相互協調的自己観」<sup>17)</sup>－とも関連している可能性が考えられる。西欧では自己は一個の個として独立し明確に自己を主張するのに対し、日本では他者との関係の中に自己があることが重視され、まわりの人や状況に合わせようとするとされるが、そのようなあり方が「盗んでも生き抜く」という解決法をはじめから問題の視野から外してしまうとも考えられる。国語教科書を国際比較した研究でも、主人公が他者と対立した時にどのように葛藤処理をするかを分析すると、日本では自分のやり方を最後まで通す「自己一貫型」ではなく、相手の意見や周囲の状況に合わせる「自己変容型」が多い傾向が示され（塘，2013）<sup>19)</sup>、また日本の教科書では深刻な状況をそのまま受入れ、その中で悲しみに耐えたり、自分を犠牲にしたり、心の平安を求めたりする主人公が描かれていると報告されている（今井，1990）<sup>20)</sup>。

「余生の充実」が日本文化の考え方に由来するのか、西欧等でも「余生の充実」が見られるのか、国際比較調査をすることが望まれる。更に「正しさ」を問わず、現実的に最善の方法を求めるあり方は道徳性の発達の観点からみてどう位置づけられるのか考えていく必要があると考える。

## Ⅵ. おわりに

Heinzの例話に対する回答として、最近の大学生において今までにあまり見られなかった考え方－「他の方法の考慮」と「余生の充実」－が見られたため、それらの考え方を道徳性発達の質問紙－DITに質問項目としてつけ加えて、現在の大学生がその考え方をどの程度重要ととらえるのか実証的に検討し、合わせて学部間の違いについても検討を行った。被調査者はスポーツ系・医学系・看護系の3学部の大学1年生239名である。各ステージの考え方を表すDITの11項目と新たな2項目の重要度と、1番重要から3番目に重要までの項目を選んでもらった。その結果1) 因子分析の結果2項目は他項目とまとまることはなかった。2) 2項目とも学生から重要ととらえられており、特に「他の方法の考慮」は得点が高かった。3) 学部により重要ととらえる考え方に違いが見られた。4) 「余生の充実」は看護系で重要度が高く、医学系では有意に低かった。「余生の充実」の考え方が日本の文化に

由来する考え方なのか、看護学専攻が関与しているのかの検討、及び道徳性の発達の観点からみてそのような考え方はどう位置づけられるのかを検討することの必要性が示された。

## 文献

- 1) Kohlberg, L. : Essays on moral development vol.2 : The psychology of moral development. Harper & Row : New York, 1984.
- 2) 山岸明子：道徳性の発達に関する実証的・理論的研究, 風間書房, 1995.
- 3) Colby, A., Kohlberg, L., & collaborators. : The measurement of moral judgement. vol.1 : Theoretical foundations and research validation. Cambridge Univ. Press : New York, 1987.
- 4) Rest, J., Cooper, D., Coder, R. et. al. : Judging the important issues in moral dilemmas : An objective test of development, *Developmental Psychology*, 10, 491-501, 1974.
- 5) Rest, J., Narvaez, D., Bebeau, M.J. et. al. : Post-conventional moral thinking : A neo-Kohlbergian approach, Erlbaum : New Jersey, 1999.
- 6) 山岸明子：青年の道徳判断の発達測定のための質問紙の作成とその検討, *心理学研究*, 51-2, 92-95, 1980.
- 7) 櫻井育夫：Defining Issue Testを用いた道徳判断の発達分析, *教育心理学研究*, 59, 155-167, 2011.
- 8) Rest, J., Narvaez, D., Thoma, S.J. et. al. : DIT2 : Devising and testing a revised instrument of moral judgement, *Journal of Educational Psychology*, 91-4, 644, 1999.
- 9) Akabayashi, A., Kahi, I., Ohi, M. et. al. : The development of a brief and objective method for evaluating moral sensitivity and reasoning in medical students, *BMC Medical Ethics*, 5-1, 1-7, 2004.
- 10) 堀口雅美, 大日向輝美, 木口幸子, 他 : 本学看護学科1・2年次学生の道徳的推論, *札幌医科大学保健医療学部紀要*, 7, 97-104, 2004.
- 11) 土井英子, 小野晴子, 谷口さゆり : Defining Issue Testを用いた入学時看護学生の道徳判断の現状 : ケアの倫理と正義の倫理の論争に伴うジレンマストーリーを用いて-, *インターナショナル nursing care research*, 11-4, 183-192, 2012.

- 12) 米澤弘恵, 佐藤啓造, 石津みゑ子, 他: 臨床看護師の倫理観と疲労との関係-道徳的発達段階・倫理的感受性と蓄積的疲労との比較-, 昭和学会誌, 73-3, 203-215, 2013.
- 13) 原田保秀: 会計倫理の実証研究-会計学専攻の学生に対するDIT研究のサーベイ-, 四天王寺大学紀要, 52, 47-68, 2011.
- 14) 山岸明子: 道徳判断の発達, 教育心理学研究, 24-4, 29-38, 1976.
- 15) Gilligan, C.: In a different voice: Women's conceptions of self and morality. Harvard Univ. Press, 1982, 岩男寿美子監訳. もうひとつの声-男女の道徳観と女性のアイデンティティ, 川島書店, 1986.
- 16) Kohlberg, L., Levine, C., & Hewer, A.: Moral stages: A current formulation and a response to critics. 1983. 片瀬一男・高橋征仁訳, 道徳性の発達段階-コールバーグ理論をめぐる論争への回答, 新曜社, 1992.
- 17) Rest, J., & Narvaez, D.: Moral development in the professions. Erlbaum: New Jersey, 1994.
- 18) 北山忍, 唐澤真弓: 自己-文化心理学的視座-, 実験心理学研究, 35, 135-162, 1995.
- 19) 塘利枝子: 東アジアと欧州の教科書に描かれた「いい子」像 安藤寿康・鹿毛雅治編, 教育心理学: 教育の科学的解明をめざして, 慶応義塾大学出版会, 273-276, 2013..
- 20) 今井康夫: アメリカ人と日本人-教科書が語る「強い個人」と「やさしい一員」, 創流出版, 1990.

資料1 Kohlbergの発達段階の概要<sup>1) 2)</sup>

(カッコ内は何を正しいと考えるか)

|  |   |
|--|---|
| 前慣習的水準 (道徳的価値は外的・物理的な結果や力にある)                  |   |
| ステージ1  | 罰と服従への志向 (罰や制裁を回避し権威者に従うこと)               |
| ステージ2  | 道具的功利的相対的志向 (自分、時に他者の欲求を満たすこと)            |
| 慣習的水準 (道徳的価値はよい・正しい役割の遂行、他者からの期待や慣習的な秩序の維持にある) |   |
| ステージ3  | 対人的一致、よい子への志向 (身近な他者からの期待に沿い、よい対人関係を保つこと) |
| ステージ4  | 社会システム、秩序への志向 (全体としての社会システムの維持)           |
| 原則的水準 (現実の社会や規範を超えて妥当性と普遍性をもつ原則に志向)            |   |
| ステージ5  | 社会契約的遵法的志向 (社会全体によって吟味され一致した基準に従うこと)      |
| ステージ6  | 普遍的倫理的原則への志向 (普遍的倫理的原則に従うこと)              |

資料2 Heinzの例話

Heinzの妻が、がんで死にかかっている。医者は「ある薬を飲めば助かるかもしれないが、それ以外に助かる方法はない」と言った。その薬は最近ある薬屋が発見したもので、かかった費用の10倍の値段で販売している。Heinzはできる限りのお金を借りてまわったが、必要な額の半分しか集まらなかった。Heinzは薬屋にわけを話し、薬を安く売るか、または不足分は後で払うから、今ある額で売ってくれるように頼んだ。しかし薬屋は「私とその薬を発見した。私はそれを売ってお金をもうけようと思っているのだ」と言って、頼みをきかなかった。Heinzはとても困って、その夜、妻を助けるために、薬屋の倉庫に押し入り、薬を盗んだ。

---

**Research Reports**

---

**Abstract****Reconsidering of Items of Defining Issues Test (DIT), a Questionnaire for Moral Development and Difference between Nursing Students and Students of other Faculties**

The purpose of this study was to add items of new way of thinking to Heinz's story of DIT : Defining Issues Test that was made by Rest and has been used widely as a questionnaire that can assess Kohlberg's stages of moral development and to examine difference of replies between three faculties. Items of new way of thinking were 1) consideration of other method and 2) consideration of the rest of one's life. Participants were 239 freshmen who major in nursing science, medical science and sports science. They were asked to assess the importance of eleven and added two items and to select important items the first to the third.

The main results were as follows : 1) Factor analysis showed that new two items were not included in any factors. 2) Two items, especially item of consideration of other method, were assessed as important. 3) Items of way of thinking assessed as important differed in three faculties. 4) Nursing students assessed items of consideration of the rest of one's life as important but medical students didn't. It showed necessity to examine whether consideration of the rest of one's life derives from Japanese culture or is related to majoring in nursing science, and to examine how such way of thinking is considered from the viewpoint of moral development.

Key words : moral development, DIT, Kohlberg, care, nursing students